

「次代を担う支援者養成研修（令和7年度）」実施報告

8月9日から10月18日にかけて「次代を担う支援者養成研修」を開催し、27名の方が受講されました。

本研修実施にあたって

本研修を実現できたのは、悩みがあってもだれにも相談することができず、帰る場所さえ見失ってしまった子ども・若者たちを支援している、本研修の講師をお引き受けいただきました団体様の圧倒的な熱意によるものです。

不登校・ひきこもり支援を目的とするアウトリーチ研修は国を始め他県でも行われているところもあります。しかし、4団体が自主的に講演及び実地研修を協働して実施する事例は確認できず、実地研修だけでなく講演も実践に基づいた非常に貴重な機会になっていると考えています。今回が3回目の開催となりますが、これだけ実践に基づいた研修は他に類を見ないものになっていると自負しております。

困難を抱える若者の増加が課題であると同時に、その支援者の養成も社会的課題とされています。

子ども・若者の支援にかかわることを目指す参加者の皆様方が、困難を抱える子ども・若者への支援に関する理解を深めるとともに当事者性を高めて、将来の支援者として、気づき・つながり・寄り添い・信頼関係を築く実践力の向上を図り、少しでも子ども・若者たちの未来が明るくなってほしいと願っています。

愛知県生涯学習推進センター センター長 伊佐治 進

参加者	講 演	1日目	27名、	2日目	21名
	実地研修		19名		
	全体交流会		16名		

講演1 「子どもの支援のあり方」

NPO 法人陽和 理事長 渋谷 幸靖 氏

【内容】

「支援」というとどうしても立場や序列が生まれてしまうが、「寄り添う」ことが大切である。困難を抱えた子どもたちはどういった背景があるかを知らずに支援はできない。

少年院に入った子どもの約8割は、虐待にあったり、親がギャンブル依存であったりといった「逆境体験」がある。困難を抱えた子どもは心の傷や生きづらさを抱えている。誰かに相談すらできず、努力しようにも頑張れない環境にいる子が圧倒的に多い。また、発達障害や知的障害を抱え

ている子も存在する。福祉の目線を取り入れていきながら、その子の特性を見ていくことで、いかに適切な環境に導いていくことが必要である。

非行に走ってしまった子どもは寄り添ってもらった経験が少ないため、心に鍵をかけてしまう。正論を伝えることは大事だが、そのまま伝えると子どもには「否定」に感じてしまう。自分たちも同じ目線や価値観を持ち、優しさをもって話すこと。居場所があり、本音が言えて失敗を受け入れる環境になればおのずと子ども達は心の余裕ができ、はじめて反省の気持ちが生まれてくる。

陽和が活動をしているうえで大事にしていることは、「過去を価値に変える」である。子どもたちが苦しんだ過去を価値に変えていくには、今が幸せであることが重要である。過去は思い出に変わっていく。子どもたちが幸せになる社会を作ることが目標である。

【参加者の声】（一部）

- ・ ご自身の体験をもとに立ち上げられ、ここまでの事業に育てられたことにとてもすばらしいと感じました。私の周囲には、触法少年についての偏見がすごい人も多く、つらい思いをしていますが、渋谷さんのように受容しかかわり続けるといふ大人がもっと増えるとよいなと思いました。まずは私自身が、かかわりの機会やご縁を見つけたいです。
- ・ 一人ひとりの行動の背景に焦点を当てるのが大切だと強く感じた。これを理解した上で子どもたちの話や気持ちを受け入れることで、子どもの人に対する意識を肯定的な方向に変えることができるのだと思った。やってしまったことを責めるのではなく、熱意を持って思いを伝えることで、人生という非常に大きなものを変えられるということが印象に残った。
- ・ 子ども達の生の声が聞けたのが印象的でした。
- ・ “過去を価値に”というのが、たしかに大事だと思った。自分も過去にいじめがあったので、どんな気持ちか、どんなことをしてほしいのかがある程度分かるので、すごく大事だと感じた。
- ・ 今回、実際自立援助ホーム運営の渋谷さんのお話、そして頑張っている中学生の話聞くことができ、本当に良かったです。ご自身の過去をふまえて、寄り添い、受け入れていらっしゃる。子供達の人生に「本当の大人」としてサポートしていらっしゃる素晴らしいと思いました。多くを学ばせていただき、ありがとうございました。

講演2 「若者へのアウトリーチ ～『ここがあってよかった』そう思える居場所を～」

NPO 法人全国こども福祉センター 栗本 未来 氏・井田 真桜 氏

【内容】

自分自身の問題に向き合いともに自己成長を目指す団体として、こどもや若者主体で運営し、着ぐるみを着て「アウトリーチ」活動（募金活動や声かけ、声出し）を行っている。事務所ではメンバー同士が一緒に食事やボードゲームなどで交流を深めている。

「アウトリーチ」とは、援助機関に来ることができない・来ることを好まない人たちに対してサービスやアドバイスを提供することである。全国こども福祉センターでの「アウトリーチ」は支援する・される側の区別がなく、「アウトリーチ」を受けたこども・若者が同世代に声をかけてメンバーへと誘い入れ、一緒に活動を行っている。また、着ぐるみを着て活動することでコミュニケーション

のハードルを下げ、キャッチ(勧誘)との区別をつけるなどしている。

虐待を受け家出をした少女に対し、今後どのような支援が必要かを考えるグループワークや、事務所で実際に行っている「トークテーマランプ」を用いた交流体験を行った。事務所内での交流は、あえて自己紹介の場を設けず、ボードゲームや食事などで自然と打ち解けるような方法をとっている。

全国こども福祉センターは、年代問わず誰でも受け入れ、苦手な人がいてもできるだけ排除せず、基本的には意見を否定しない(肯定する)こと、さらに、活動中の行動を義務化せず各々が活動しやすい環境作りを大切にしている。多種多様なメンバーがいる中で、今後もよりよい活動をしていくために試行錯誤を行っている。

【参加者の声】(一部)

- ・ 誰であっても排除しない、全員が輪っかになろうとすることはしない、活動を義務化しないなどの大切にしていることが印象に残っている。
- ・ 主体者であり当事者でもあるお2人のお話がうかがえて、たいへん貴重な経験となりました。自らもしんどい思いをしているからこそよりそえることもあると思います。けれども、しんどさを思い出すことも多くあると拝察します。活動をがんばっていただきたいという思いと同じぐらい、ご自愛いただきたいと思いました。応援しています。
- ・ アウトリーチというものを知ることができてよかった。「支援」はする側の満足感ではなく、受ける側が必要と思えるものを行うことが「支援」になるという基本的なことを理解することができた。
- ・ 誰も排除することなく、ありのままの姿を受け入れる姿勢が印象に残った。誰しも否定されることは辛いし、肯定されることは嬉しい。このことを、日頃の生活でも意識することで、自分も他者も居心地よく、気持ちよく過ごせる大切なことだと思った。
- ・ 全国こども福祉センターの活動を知れてよかったです。行政・福祉ではハードルの高い、事務的になりがちな状況を、寄り添う支援で活動されているところ、また保護も行っているところは素晴らしいと感じました。これからも必要な方に届かれますように。

講演3 「アウトリーチと居場所支援の実践と学び」

一般社団法人愛知 PFS 協会 代表理事 星野 智生 氏

【内容】

夜の名古屋・栄には「助けて」とは言えず、頼る場所や相手がいない若者や若年女性が多く存在する。愛知 PFS 協会は、彼らの“声にならない声”に寄り添い、居場所を提供する事業を行っている。だれでも自由に出入りし安心できる空間で、若者がつながることができる場所を提供することを目的として、若者や若年女性に、話さなくてもいい自由や怖くない大人の存在を伝えている。このような押し付けない支援や関係性を育む支援を行っている。

愛知 PFS 協会では、一度つながった関係を切らないことをモットーに、つながりを“偶然”にするのではなく、“仕組み”にするための取り組みを行っている。そして「支援を届ける」から「支援に出会える」社会にするために制度と現場の間に立って橋渡しを行うことを大切にしている。

その後、支援者として若者に会う入口を考えるグループワークを通して「支援」の本質に近づく

体験を行った。

若者を“主体”として支援に関わり、若者の人生について共に考えていき、中間支援の重要性を理解することが支援のこれからを支えていく。すべては一人ひとりの未来のために。

【参加者の声】（一部）

- ・ 支援をすると聞くと、話を聞かなければならないというイメージがあったけれど、相手のペースを最優先し、支援者が焦らないようにしなければならないことが印象に残った。話さなくても、態度と雰囲気、相手を受け入れている側にいるという安心感を覚えてもらうことが大切だと学んだ。
- ・ 困っている人は、自分から「助けて」とは言わないというのがとても印象的だった。そして、困っている人には原因探しをするのではなく、自由を与えて、寄りそうのが良いというのが大変役に立つ学びだった。
- ・ 私は教員志望ですが、泣いている子がいたら、どうしても「大丈夫？」と声をかけてしまうと思います。その前にちょっと考えて、慎重に対応したいと思います。
- ・ 「栄でチルする？」はとても良いと思いました。若者にとって居場所があることがとても大事であることが分かりました。
- ・ 子供との対応のポイントは、人との関係全てに通じると思った。仕事やプライベートでも心がけていきたいと思いました。ボランティアで、子供の居場所をつくるために頑張っている方々がおられることに有り難いし素晴らしいと思いました。自分も自身のできることで貢献していきます。

講演 4 「街角保健室の挑戦 ～ピンクテントの灯は安心安全自由への道しるべ～」

街角保健室☆ケアリングカフェ 代表 中谷 豊実 氏

【内容】

名古屋栄にある通称「女子大小路」と呼ばれるエリアは、ホストクラブやフィリピンパブが多く、名古屋の夜の繁華街で最もディープなエリアである。そこに生きづらさや困難を抱える若年女性が多く集まってくる。若年女性の相談できる居場所として「街角保健室」は拠点を置き、アウトリーチ活動を行っている。

保健体育の教員として勤務する傍ら、自身には二つのライフワークがある。一つはケアリングラウン（病棟道化師）としての活動、もう一つは「性の健康と命の安全」である。街角保健室の誕生には、2020年に起きた新型コロナウイルス感染症の影響による社会の変化がある。若年女性の自殺率が一気に上昇した。それは学校やアルバイトにも行けず、自宅以外の居場所から出られないことでの貧困・孤立・孤独な状況が原因であると分析した。何かあったら産婦人科医などの専門家に相談でき、保健室のように落ち着くことのできる、開かれた性教育の場として、「街角保健室」と名付けた。カラーセラピーや天体観測、バルーンアートなどを用いたアウトリーチで場を和ませることで若年女性が興味を持ち、そこから気軽に相談ができる居場所として「街角保健室」は存在している。

性教育は人生のすべてに関わってくる。豊かな関係のために、適切で正しい性知識を伝えていく必要がある。

【参加者の声】（一部）

- ・ 街角保健室の事業がよく分りました。性教育は正しく伝え、沢山の人の理解してもらえるということです。ユーチューブの紹介も良かった。
- ・ 天体観測や占いなどのアクティビティを通した世間話から、信頼関係を築き、話しやすい空気感を作ることが大切だと学んだ。リストカットをしている人が多くいる街があることを知り、街角保健室の重要性を強く感じた。
- ・ 先生が明るく元気でわかりやすかったです。ケアリングカフェの必要性がわかりました。先生のおかげで元気が出ました。ありがとうございました。
- ・ 性教育は学校でもあまりできていないと思うので、性被害・性加害を減らすためにも、教員がきちんと知識を身につけておかないといけないなと思いました。
- ・ リアルで現実感のある中谷先生の講義は非常に興味関心深い内容でした。実にひきつけられおもしろい。もう一度聴講したい。

実地研修

講師の各団体の活動に参加していただきました。複数の団体の活動に参加された方も多くいらっしゃいました。

【参加者の声】（一部）

- ・ 職員の方と子どもたちが本当の家族のように感じました。安全な場所だと思いました。（研修先：陽和）
- ・ 若者の支援活動を知ってもらう事は大切と思った。募金をしなくても関心を持つ人が多いと感じた。皆様これからも頑張ってください。（研修先：全国こども福祉センター）
- ・ レッテルを貼って人を見ないこと、ありのままの姿を受け入れることの大切さを学んだ。また、職員さんとの対話を通し、生きづらさを抱える人に対する自分自身の考えを深めることができた。（研修先：愛知P F S協会）
- ・ 裏方に入れて、たくさんの気づき、関わり方を学びました。中谷先生の姿勢を直接見せて頂けたことは大きな財産になりました。（研修先：街角保健室☆ケアリングカフェ）

全体交流会

実地研修参加者による実地研修の感想や今後の活動についてお話しいただき、各団体の講師及び県関係課（あいちの学び推進課）担当職員からもコメントをいただきながら、参加者同士の交流をしました。

【参加者の声】（一部）

- ・ 参加者さん自身やご家族の中にも生きづらさを抱える方がいることを知り、目に見えない悩みを抱える人は多くいることを学んだ。多様な考え方から、自分では言語化できていなかった学びを

得ることができた。

- ・ 一参加者の意見発表を聞いて、皆さんが活々と発表され視野が広がり、この研修を通して、機会があればこの参加されている団体等を一般の人に紹介していきたいと思った。
- ・ 色んな立場に居る方々が、若者達が生きやすい場所を作るために、活動したいと思っていること、そんな仲間が居ることが嬉しい。
- ・ 様々な視点からの気づきや思いがグループワークで分かって良かった。これからのことについてや実地研修の方との交流、共有ができてとても良かった。
- ・ 様々な立場の皆様のお話をきけたこと、再び先生方全員にお会いできたこと、この研修に参加させて頂いたことは、自身にとっていろいろな気づき特に「寄り添う」 本当の意味の「寄り添う」という意味、行動などについて考えさせられました。

修了証

すべての研修に参加された15名に修了証を授与しました。

【研修全体についての感想】（一部）

- ・ 参加する前は、関心を深めたいという、自分本位な考えが強かったが、参加後、安心できる居場所の重要性を学び、関心を外へ向けることができ、より良い支援とは何か考えることができた。正解がない問いに対し、できることを考え続け、実践することを大切にしたい。
- ・ いろんな専門の方と交流できて学びが深まりました。
- ・ 今後、自分に何か出来るか分からないが、学びを糧に若者に接していきたいと思います。
- ・ いろんな所にアンテナをはりめぐらして、興味を持つことで、こどもたちと仲良くなる武器が多くなると感じた。
- ・ 自分の今、できる所から、一歩ずつ活動していきたいと思った。

【修了書授与者の参加報告】（一部抜粋）

- ・ 研修場面で、直接子どもの思いや希望、一歩踏み込むことができ自信に繋げた就労体験について直な思いを聴くことができた点は、関わりのプロセスで得られた結果であり、成長であると実感することができた。（N）
- ・ 人口減少に転じた日本でこれからの未来を担っていくべき子ども世代が少しでも幸せな人生を歩めるよう健全な日本が作れるよう大人の課題がさらに明らかになった。（Y）
- ・ 4つの団体がそれぞれの想いで、やり始めて、続けていることに感謝、感激しました。（S）
- ・ 今回の研修を通じて、アウトリーチによって手を差し伸べ積極的に支援する仕組みがあることを知りました。親の立場と子供の立場、子供の意見を重視してこのような支援が活用されると大切な子供たちの将来が明るくなると思います。（I）
- ・ 子供もそうだが、大人も、今も居場所がない人はたくさんいると思う。私のように大人になっても居場所を探す人間のためにも大人の居場所も作ってあげたいと思った。（K）